みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

SER no.073; 趣旨説明

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 林, 勲男 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001384

趣 旨 説 明

林　勲男
国立民族学博物館

2004年12月26日に発生したスマトラ島沖を震源とする巨大地震は，インド洋沿岸のほぼ全域に津波による被害をもたらしました。海底岩盤の破壊は，震源地にあたるスマトラ島東北沖から北に約1,300キロメートルにわたって発生し，その地震の揺れは８分間以上も続いたと考えられています。マスコミなどでも，その津波のスピード，高さ，破壊力が注目されました。時速700キロメートルから800キロメートルという，とてつもないスピードでインド洋を渡り，スリランカやインド，さらにはアフリカの東海岸にまで到達し，各地に甚大な被害をもたらしたわけです。

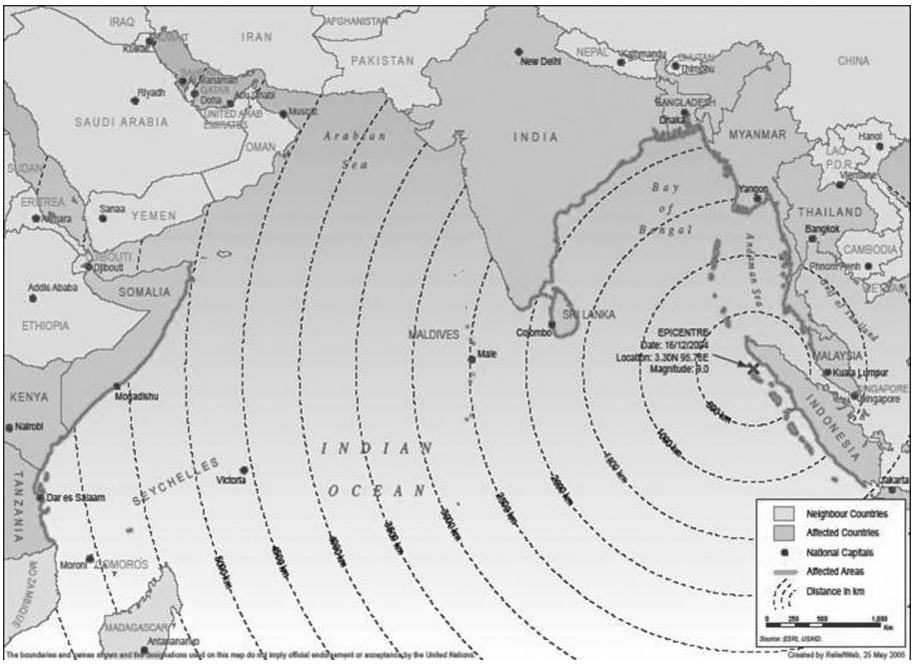

図１　津波被災地と震源からの距離
（出典：United Nations Office for the Coordination of Humanitarian Affairs – ReliefWeb 25 May 2005）

国連のOffice of the Special Envoy for Tsunami Recoveryの発表によりますと，被災国ごとの死者・行方不明者数は表１のとおりです。

国際的観光リゾート地が被災したこともあり，津波の到達や被害発生の状況を観光客や住民が記録した映像が，直後からテレビやインターネット上に流れました。被災地域

表１　死者・行方不明者数

国　名	死　者	行方不明者[1)]	合　計	出　　典
インドネシア	130,736	37,000	167,736	１周年共同報告書，2005年12月[2)]
スリランカ	35,322		35,322	同上
インドネシア	12,405	5,640	18,045	インド政府，2005年１月
モルディブ	82	26	108	モルディブ災害対応センター,2005年12月
タイ[3)]	8,212		8,212	タイ内務省，2005年10月
ミャンマー	61		61	OCHA-UNDP，2005年11月
マレーシア	69	6		同上
ソマリア	78	211	289	同上
タンザニア	13		13	同上
セイシェル	2		2	同上
バングラデシュ	2		2	メディア報道
ケニア	1		1	OCHA-UNDP，2005年11月
合　計	186,983	42,883	229,866	

注１）　いくつかの国は死者と行方不明者の数を分けていない。
注２）　UN Office of the Recovery Coordinator，国連開発計画（UNDP），アジア開発銀行，国際赤十字・赤新月社（IFRC），世界銀行によってなされた報告。
注３）　タイにおいては，37カ国2,448人の外国人観光客が含まれる。

はインド洋沿岸ですが，被災地住民だけでなく，多くの出稼ぎ労働者や観光客が亡くなり，家族や近親者を亡くした人も大勢います。この2004年12月26日に発生した地震津波，それはまさに世界を震撼させた災害となったわけです。

アナン国連事務総長の総額約９億7,700万ドルの緊急支援の求めに対して，拠出表明は11億ドルを超え，各国政府，国際機関，NGO，そして民間企業も参加しての「援助競争」あるいは「第２の津波」とも呼ばれる過去に例のない反応を世界は示しました。「国境なき医師団」には，必要額の４倍にあたる日本円にしますと156億円の支援金が寄せられました。数十万人の支援者に他の災害への転用を打診した結果，返金希望者はわずか1.1％に過ぎず，余剰金約108億円をパキスタンなどの支援に振り分けたと報じられています。

このように，救援の手は世界中から差し伸べられたわけですが，そのことは緊急支援から復旧・復興に至るプロセスを容易にする十分条件では決してありません。支援の分配や仮設住宅・恒久住宅の供給，インフラ再建，生存者の心のケアや自立支援，次の災害に備えての防災教育や体制・設備の拡充などをめぐってさまざまな課題が山積しているというのが現状です。

「災害プロセス」というとらえ方が，かなり知られるようになってきましたが，実際そのプロセスも，より長期的な視点で見れば，それは災害サイクルの一部分であるということを理解していただけると思います（図２）。災害が発生し，それに対する緊急対

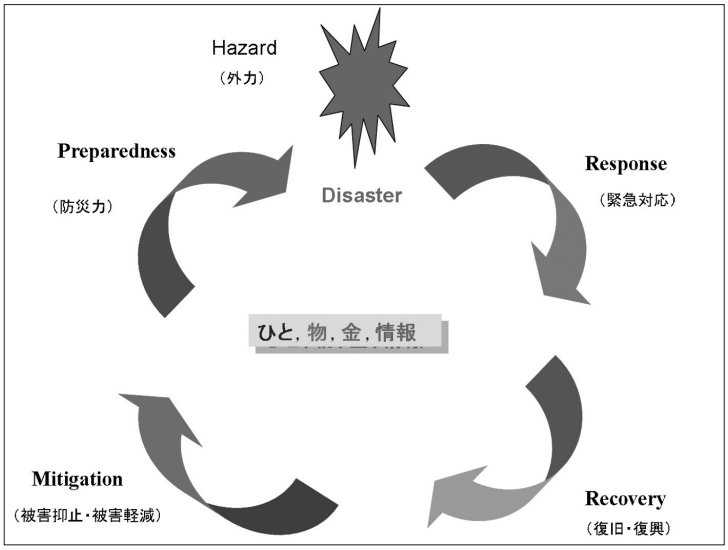

図２　災害サイクルー１

応が被災地に国内あるいは国外から差し伸べられ，次の復旧・復興の段階に移っていくわけですが，これはあくまでも図で示したものであり，実際の動きというものは，緊急対応が終わって復旧・復興，それが終わって被害抑止・被害軽減の対策がとられていくというような明確な段階を踏んでいくものでは決してありません。それは，皆さんよくご存じの，今回のインド洋地震津波災害の被災地の現状をご覧になれば，お解かりいただけると思います。

ただ，被災地の支援に携わるにしろ，あるいはその研究に携わるにしろ，こうした地震あるいはそれに伴って発生する津波などは，とりわけ今回のようにプレート境界で発生した地震というものは，長期的なサイクルの中にあるという事実を重視しなければなりません。つまり100年後か200年後かはわかりませんが，いつか必ずそこで再び大きな自然界からの破壊力（ハザード）が発生するということです。したがって，次の災害への備えということを念頭に入れた支援のあり方，それから研究のあり方というものを，私たちもみずから問うていかなければならないと考えます。

今回の研究フォーラムは，2004年のインド洋地震津波災害に関する２回目のものです。文化人類学者や地域研究者，他の研究分野から被災地を専門としている方々にかかわっていただいたそもそものきっかけというのは，京都大学防災研究所の河田惠昭先生を代表とした科学研究補助金（特別研究促進費）「2004年12月スマトラ沖地震津波災害の全体像の解明（課題番号：16800055）による調査活動でした。災害発生直後から，この科研費のプロジェクトのもとで幾つかのサイトがインターネット上に立ち上げられ[1)]，

さらに，インドネシア，マレーシアに関しては，あとで発表もしていただきます山本博之さん，西芳実さん，篠崎香織さんたちに，かなり詳細な現地情報を掲載していただいています[2)]。

この河田科研では，インドネシア，インド，スリランカで，それぞれの地域の専門家の方々にカウンターパートを設けて，調査を行っていただきました。それから，タイに関しましては，私が代表を務める科研を使って市野澤潤平さんに調査をしていただきました（表２）。

表２　被災地調査

インドネシア	2005年２月８日～２月16日	西芳実，山本博之，堀江啓，J. Thanthawi
インド	2005年２月20日～３月５日	杉本良男，杉本星子，深尾淳一，S. Subbiah, A. Sagayaraj
スリランカ	2005年３月12日～３月21日	高桑史子，K. E. Karunaratne，S. Gunasekara
タイ	2005年２月16日～３月２日	市野澤潤平

報告会は2005年４月に上智大学と民博で開催しました[3)]。科研そのものの報告会は，2005年３月下旬に神戸で開催いたしました。この科研は，先ほど地域の専門家にかかわっていただいたとお話しましたが，地震や津波工学の研究者が中心を占めるプロジェクトでした。その成果は，2005年12月末に，ちょうど災害から１年という時期に英文で報告書がまとめられ，インターネット上でも公開されています[4)]。

プーケット島のカマラビーチにプーケット日本人会が，今回の津波で亡くなった方々の慰霊之碑を建立しました。その慰霊之碑には「久遠の凪を願う」と刻まれております。しかし，先ほどお話しましたように，インド・オーストラリアプレートとユーラシアプレートの境界地域というのは，まさに地震の巣です。いつまた大きな地震が起き，大きな被害をもたらすかわかりません。この地域に暮らす人々は，決して「久遠の凪ぎ」というのはないと考え，防災策をとることが必要です。

現在，「津波の早期警報システム」の設置が国際的に議論されています。これは，昨年（2005年）１月に神戸で開催されました国連防災世界会議でも，今年（2006年）の７月からその運用を開始する目標が掲げられています。

スマトラ島南西岸沖のプレート境界上で過去に起きた主な地震を調べた結果，およそ200年周期で巨大地震が発生するムンタワイ諸島海域が次の巨大地震の震源域となる可能性が高いとの研究があります[5)]。そうなると，パダンやベンクルといった沿岸都市が大打撃を被ることになります。それは100年後あるいは200年後かもしれません。そうしますと，今回大きな被害を受けましたスマトラ島の北部あるいはインド洋の他の沿岸地域への被害というだけではなくて，もっと直接的な被害をこうむる可能性のあるスマトラ島の西海岸，中部の地域の防災を緊急に考えなければならないということになります[6)]。

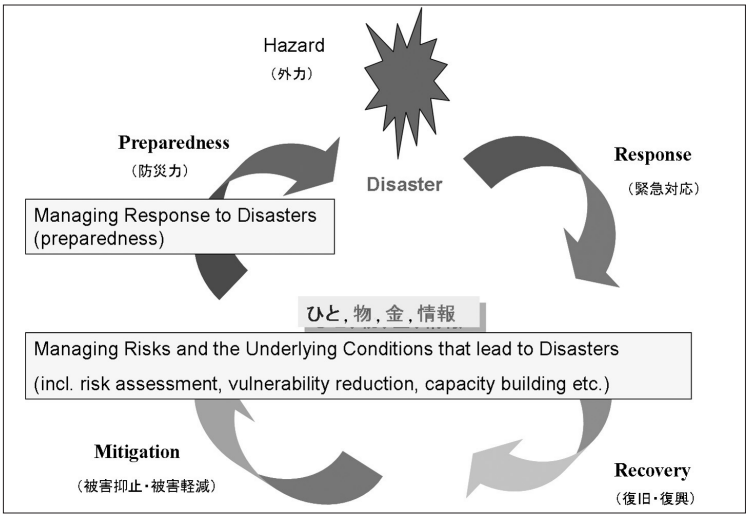

図３　災害サイクル―２

先ほどお見せした図に，新しい情報を加えました（図３）。次の災害に備えて，「リスク・アセスメント」を行うこと，「脆弱性の軽減」を図ること，個人や地域社会それに行政も含めた防災の「能力」を付けるための自己努力と支援，そのための研究が強く求められています。それから，今回被害を受けた地域，とりわけ震源に近いインド洋の東側は，いつかまた大きな災害に見舞われる可能性があるわけですので，災害が発生したときにどのような対応をするかということを事前に十分検討し，備えをしておくことが求められています。先ほどお話しましたように，プレート境界型の地震とそれに伴う津波というものは，いつか必ず起きるものです。したがって，災害サイクルの中で，現在その被災地の人々は生活の再建，地域の復興に歩み出しているのであり，そうした社会の再建，地域の復興を研究する，あるいは支援をする私たちも，この災害サイクルの中で被災地域を見ることを忘れてはならないと思います。

本日発表していただきますのは，スリランカ，インド，タイ，インドネシアの研究に長年携わっていらっしゃる方々です。

災害後１年ということで，マスメディアなどでも被災地の現状とその課題については，さまざまな報告がなされていますが，研究者の視点から見たときに，どういう状況が見えてくるのか，どういう課題があり，どのような対処の仕方が必要なのかということが当然あると思います。そうした点を中心に今日は報告していただきます。最後の全体の討論の中では，個々の詳細なデータというものを踏まえた上で，津波あるいは地震の被災地は復興のプロセスにあるということ，さらには将来の防災を考える必要があるという観点から，共通する問題について議論ができればと考えています。

私からは以上です。早速ご報告に移りたいと思います。

注

1) 2004年12月26日　インド洋地震津波災害　http://www.drs.dpri.kyoto-u.ac.jp/sumatra/，2005年３月28日 スマトラ島沖地震津波災害 http://www.drs.dpri.kyoto-u.ac.jp/sumatra/050328/

2) 2004年スマトラ沖地震・津波 関連情報　http://homepage2.nifty.com/jams/aceh.html

3)「緊急支援から地域再建へ：インド洋地震・津波災害と地域社会」2005年４月９日（土）　上智大学中央図書館Ｌ－911,「インド洋地震津波災害被災地の現状と復興への課題」2005年４月23日（土）　国立民族学博物館第５セミナー室

4)『2004年スマトラ島沖地震津波災害の全体像の解明 Comprehensive analysis of the damage and its impact on coastal zones by the 2004 Indian Ocean tsunami disaster』（研究代表者 京都大学防災研究所　河田惠昭），2005年６月。
http://www.tsunami.civil.tohoku.ac.jp/sumatra2004/report.html

5) Sieh, Kerry 2005 The Next Giant Sumatran Mega thrust Earthquake: From Science to Human Welfare, *Proceedings of the International Workshop on the Restoration Program from Giant Earthquakes and Tsunamis – Part 1 of the Memorial Conference on the 2004 Giant Earthquake and Tsunami in the Indian Ocean* –, pp. 1-14, Dec. 14-15, 2005, Tokyo.

6) 2007年９月12日，スマトラ島南西部沖を震源とするマグニチュード8.4の地震が発生し，その後もマグニチュード７クラスの余震が続いた。震源に近いベンクル州では死傷者や建造物の損壊等の被害が発生した。